

# 課外フィールドワーク「海士町訪問研修」の実践と 学生評価アンケートを用いた効果分析に関する報告

竹川 俊夫\* ・ 仲野 誠\*\*

A Report on an Extracurricular Fieldwork Program in Ama-cho Town and an Analysis on Its Effectiveness with a Student Evaluation Questionnaire

TAKEGAWA Toshio, NAKANO Makoto

キーワード：地域学 地域学部 地域学入門 課外フィールドワーク

Key Words: Regional Sciences, Faculty of Regional Sciences, Introduction to Regional Sciences, Extracurricular Fieldwork Program

## 1. はじめに

表題にある「海士町訪問研修」とは、鳥取大学地域学部における初年次必修科目「地域学入門」<sup>(1)</sup>から派生した課外フィールドワークであり、本年度（2015年度）で7年目（7回目）を数える。実施のきっかけとなったのは、2009年度より「地域学入門」の講義のひとつコマを海士町長の山内道雄氏に担当いただいたことであった。「海士町」と言えば、島根県の隠岐諸島の島前地域に位置する人口約2,400人で高齢化率約4割という典型的な過疎離島の自治体でありながら、大胆な給与カットをはじめとする町長以下行政職員の身を切る行財政改革の断行や、都市部からIターンした若者が島の特産品の開発や教育改革などの地域再生の諸課題に果敢にチャレンジし、目覚ましい成果を挙げたことなどでその名が全国に知られるようになり、最近では国が推進する地方創生のモデル自治体として取り上げられるなど、ますます注目度が高まっている。

そのような海士町の取り組みを指揮する山内町長の講義が始まった2009年度は、ちょうど数々の改革が軌道に乗り始めた頃であり、今日ほどその名が知られていたわけではなかった。そのため、講義に参加していた1年生たちも、「海士町ってどこにあるの？」程度の状況で山内町長から一連の改革に関するエピソードを聞くことになったのだが、実際には課題山積の現場で最前線に立ちながら、その困難を乗り越えてきたリーダーの気迫あふれる言葉に圧倒された学生たちは、その講義を通じて一気に海士町への関心を高めることになった。そして講義が終了



地域学入門で熱弁をふるう山内道雄町長。

\* 鳥取大学地域学部准教授（地域政策学科）

\*\* 鳥取大学地域学部教授（地域政策学科）

すると、町長の話に感動を覚えた学生から、「是非海士町に行って町長の話が本当なのか確かめたい」という感想がいくつも寄せられることになった。「地域学入門」のスタッフを務めていた当時の教員もまた、学生たちと思いと一致するところがあり、学生・教員の中で海士町に行きたいと手を挙げたメンバーが自発的に集まって「課外フィールドワーク」の企画を立てることになった。これが「海士町訪問研修」の原点であり、筆者らはその際の発起人であった。以来今日に至るまで、学生の課外活動のひとつとしての本研修をコーディネートするだけでなく、実際に学生を引率して現地に足を運んでいる。

2009 年の第 1 回訪問研修以来、毎年恒例のプログラムとして既に 7 回の訪問団が結成され、延べ 78 名の学生が海士町を訪問した。毎年研修を実施するたびに、参加した学生たちは、現地で見聞きすることや島の自然、食べ物など、五感を働かせながら多くのことを学び、吸収し、何がしかの成長を遂げていると感じながらも、これまでまとまった形で振り返りや評価をする機会を逸してきた。今後学部の改組も予定されるなか、「課外フィールドワーク」という非公式な位置付けをこのまま継続していて良いのかという検討課題もあるだろう。そこで本論では、まず「海士町訪問研修」の一連の取り組み内容を紹介したうえで、2015 年 2 月にこれまで研修に参加した学生を対象に実施したアンケート調査を元に、参加学生の満足度や課題認識などの研修に対する評価分析を行う。さらにこの分析を通じて、研修が学生たちにどのような教育的効果をもたらしたのかを検討する。

## 2. 海士町訪問研修の概要

### (1) 学生の参加状況

表1 海士町訪問研修参加学生の内訳

表 1 の通り、2015 年度の研修参加者数は 1 年生 11 名であった。過去を振り返ると、最多が 16 名で最少が 5 名と幅があり、また、学科別では、政策がトータル 55 名と 7 割を占めており、以下文化（芸術文化センター含む）

	09年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	総合計
政策	11	14	3	10	7	4	6	55
教育	0	0	1	0	1	0	2	4
文化	0	1	3	4	3	1	0	12
環境	0	1	1	2	0	0	3	7
合計	11	16	8	16	11	5	11	78
男子	2	8	3	3	6	1	5	28
女子	9	8	5	13	5	4	6	50

が 12 名、環境が 7 名、教育が 4 名と、政策学科の学生が主体となるのが毎年の傾向である<sup>12</sup>。一方男女別では、男子がトータル 28 名であるのに対して女子は 50 名と、女子の参加者が大きく上回る傾向がある。人数が多いことも影響していると思われるが、筆者らの印象としても、男子よりも女子の方が活発に感じるのが例年の傾向である。

参加者の募集は、基本的に「地域学入門」の第 3 部「実践の知に学ぶ」のシリーズで実施される山内町長の講義終了時に研修の実施に関するアナウンスを行い、翌週以降最終講義の日まで学生からの申込を受け付ける。最終講義日には、講義終了後に申込書を提出した学生を集めて研修に関する説明会の実施日時を通知し、この説明会への参加と（2）で説明する事前研修への参加をもって当年度の研修参加人数が固まるという流れになっている。なお、説明会では、コーディネート役の教員（竹川）と参加学生との連絡や研修の準備・実施において中心的な役割を担う「実行委員長」（1 名）「副委員長」（1 名ないし 2 名）及び「会計」（1 名ないし 2 名）の役員を選出し、以降の

ミーディングは実行委員の面々を中心に開催する。

## （２）事前研修

海士町訪問研修への参加条件は、現地訪問の前に２日にわたって開催される「事前研修」のうち、いずれか１日は必ず参加することであり、都合により事前研修に両日とも参加できない学生の参加は認めないことがルールである。現地訪問の際に学生の主体性を確保し、研修効果を最大にするためには「予習すること」が非常に重要だからである。その「予習」は海士町を事前に余すところなく理解することが目的ではなく、調べてゆく過程で海士町の何が分からないかを明らかにし、現地に行行って確認すべきこと（研修課題）を一人ひとり明確にすることが目的である。このように研修課題を明確にすることで、学生自身の学びへの意欲が増して現地での取り組み姿勢がより能動的となるとともに、そのような学生と接した現地の方々にとっては、鳥取大学生の熱心な姿勢を見ることで彼らに対する評価を高め、ひいては鳥取大学と海士町との信頼関係を強めることにつながる。

2015年度の事前研修は、第１回が９月２日（水）の13:00～18:00の５時間、第２回は翌３日（木）の13:00～17:00の４時間、計９時間にわたって開催された。第１回は、①隠岐島前高校の魅力化改革、②隠岐・海士町の諸統計、③海士町の自然環境と隠岐ジオパーク、の３つのテーマについて学生が分担のうえ事前に調査し、パワーポイントに情報を整理したものを発表した。個々のプレゼンテーションを確認したあと、学生・教員は報告者に対して様々な角度から質問を浴びせることで、報告者は海士町に行行って確認すべきこと（研修課題）を洗い出す。この作業を３つのテーマごとに繰り返すことと並行して、①の島前高校の魅力化改革に関しては、海士町の取り組みを取材したテレビの録画VTRを鑑賞することで、さらに具体的なイメージを共有した。

第２回も初日と同様に、①隠岐・海士町の歴史・文化、②海士町の産業振興、③海士町の保健・医療・福祉、の３つのテーマについて学生が事前に調べたことをプレゼンテーションするとともに、それに対する質疑応答を行った。さらにIターン者が海士町で株式会社（巡の環）を立ち上げ、ビジネスの手法を用いて島の課題解決に向けて活躍する様子取材したテレビ録画を鑑賞し、Iターン者たちの海士町に対する思いへの理解を促した。

なお、実行委員は、以上の事前研修と並行して宿舎となる「隠岐自然村」の宿泊予約を行ったほか、旅の行程や交通費、宿泊費、食費などの重要な情報を集約した「研修のしおり」を作成し、参加者全員に配布した。

## （３）現地訪問

事前研修などの一連の準備作業を経て、いよいよ９月７日（月）から９月10日（木）までの３泊４日の日程で現地訪問へ出発した。2009年度から2013年度までの５カ年間については２泊３日の日程で研修を実施していたが、３日間では詰め込み型で余裕のない研修になっていたため、参加学生と話し合った結果、2014年度からは３泊４日に延長することとなった。これにより日程に多少ゆとりが生まれたので、これまで実現できなかった西ノ島でのジオツアーを最終日に追加した。

以下は、2015年度の訪問研修の１日ずつの行程表と、実際の訪問の様子を記録した写真である。なお、2015年度の現地訪問では、コーディネーターの竹川・仲野のほか地域教育学科の鈴木慎一郎准教授と地域再生プロジェクトの澤田廉路特命准教授にも参加いただき、学生11名と教員4名の総勢15名で海士町を訪問した。

【1日目】9月7日(月)	
6:15	大学本部前よりバス出発 → 8:20 七類港着
9:30	フェリー(くにが)七類港発 → 12:40 菱浦港(海士町)到着
12:45~13:40	＜昼食: キンニャモニャセンターの船渡来流亭＞
13:40	* 隠岐開発総合センターへ移動(バス約10分)
13:55~15:05	【講義】海士町の概要と産業振興等について(産業創出課長 大江和彦氏)
15:15~16:15	【講義】海士町の保健福祉について(健康福祉課長 沼田洋一氏)
16:15	* 後鳥羽院資料館へ移動(徒歩約10分)
16:25~16:45	後鳥羽院資料館見学
16:45~17:15	隠岐神社見学
17:15	* 隠岐自然村へ移動(役場送迎約15分)
17:30	隠岐自然村チェックイン
18:30	＜夕食＞



6時間半の長旅を経て海士町(菱浦港)に到着。



産業創出課大江課長による海士町の概要と産業振興についてのレクチャーの様子。



レクチャーのあとに後鳥羽院資料館と隠岐神社を見学。



初日のプログラムを終えて隠岐自然村に到着。



【2日目】9月8日（火）	
7:30	<朝食>
9:00~11:50	【現地視察（ガイド：総務課長 吉元操氏） 潮風ファーム～岩がき工場・海士御塩司所～崎地区散策～海藻センター見学
11:55~13:00	<昼食：島生まれ島育ち隠岐牛店> * 仲野先生合流
13:00	* 隠岐開発総合センターへ移動
13:15~13:45	山内町長との懇談（会場は1F 研修室）
13:45~15:15	【講義】集落支援員の活動について（教育委員会・集落支援員 武藤文氏）
15:25~16:35	【講義】海士町教育改革と隠岐國学習センターについて （隠岐國学習センター長 豊田庄吾氏）
16:45	* さくら作業所立ち寄り後海士診療所へ移動（役場送迎約5分）
16:50~17:05	海士診療所見学・概要説明（海士診療所事務長 上田賢二氏）
17:05	* 隠岐自然村へ移動（役場送迎約15分）
18:00	<夕食：隠岐自然村> * 鈴木先生合流
18:40	* 隠岐國学習センターへ移動（役場送 迎約15分）
19:00~22:05	隠岐國学習センターで島前高校生徒と交流・夢ゼミ体験
22:15頃	* 隠岐自然村へ移動（タクシー・自然村送迎約15分）



宿泊所の隠岐しぜんむらからの見事な眺望。



2日目の午前中は海士町内を巡検。隠岐潮風ファームを見学後明屋海岸へ。



火山の噴火口だった明屋海岸は隆起と浸食で独特の景観を形成している。



海士町の特産品である岩牡蠣の加工工場を見学。



海士町最南端の集落で、かつて後鳥羽上皇が遠流の際に上陸したとされる崎地区を散策



応用藻類学研究所にて海藻の生態や商品としての活用方法などを学ぶ



午後のレクチャーで、集落支援員の武藤さんから地域に対する支援活動の現状を伺う



隠岐國学習センター長の豊田先生による島前高校魅力化改革についての講義



夕食後、島前高生との交流・夢ゼミ体験に向けてリニューアルされた隠岐國学習センターを訪問



この日の夢ゼミでは、「図書館の利用者を増やす」をテーマに、講師や島前高生と意見交換

【3日目】9月9日(水)

7:30	<朝食>
9:00	【講義】隠岐ジオパークについて(隠岐自然村 深谷村長)
10:15	*キンニャモニャセンターへ移動(バス約15分)
10:30~12:00	海中展望船あまぼう欠航につき、菱浦地区散策(フリータイム)
12:00~13:00	<昼食: キンニャモニャセンターで亀乃のハンバーグ弁当>



13:00	*巡の環事務所(村上家資料館)へ移動(バス約10分)
13:10~13:30	村上家資料館見学
13:30~15:15	【講義】(株)巡の環の取り組みについて(石坂達氏) *福祉センターひまわりへ移動(役場の送迎に変更・約10分)
15:30~17:00	【講義】海士町社会福祉協議会の取り組みについて (海士町社会福祉協議会 事務局長 片桐一彦氏)
17:05	*隠岐自然村へ移動(役場送迎約10分)
18:30~22:10	<夕食:隠岐自然村にてBBQ> *山内町長・吉元課長・豊田センター長特別参加



隠岐自然村の深谷村長から隠岐ジオパークについてのレクチャーを受ける。



代々後鳥羽上皇の墓守を務めてきた村上家の旧宅を改修した資料館を訪問。



隠岐造りの特徴や村上家の活躍について話を伺う。



(株)巡の輪のコミュニティビジネス活動を学ぶ。



海士町社会福祉協議会が運営する「福祉センターひまわり」を訪問。



片桐事務局長より、住民参加で策定した「地域福祉活動計画」についてレクチャーを受ける。



夜は隠岐自然村にて山内町長と吉元総務課長・豊田センター長を囲んでBBQを開催。



海士町の海や山の幸をいただきながら、楽しいひと時を過ごす。

【4日目】9月10日(木)	
7:30	<朝食>
8:55~9:55	【ミーティング】研修の振り返り
10:00	*チェックアウト→キンニャモニャセンターへ移動(バス約15分)
10:15~10:45	キンニャモニャセンターでお土産購入
10:51	内航船(いそかぜ)菱浦港発 → 10:58 別府港(西ノ島町)着
	*フェリーの乗船券を購入して西ノ島ふるさと館へ移動(徒歩約5分)
11:20~11:45	西ノ島ふるさと館見学
11:50~12:20	<昼食: ふるさと館隣接の「はな」>
12:25~15:15	【ジオツアー(ガイド: 西ノ島観光協会)】
	別府港~赤尾展望台~摩天崖~国賀海岸~別府港
15:45	フェリー(おき)別府港発 → 17:55 七類港着(15名で団体予約)
18:05	七類港よりバス出発 → 20:10 大学本部前着
20:15	解散



最終日の朝。海士町で過ごした3日間を振り返りながら、島で学んだことと今後の自分自身の課題についてディスカッション。



あっという間だった3日間のプログラムを終え、いよいよ海士町を後に西ノ島でのジオツアーに臨む。





内航船で西ノ島に移動。



西ノ島ふるさと館にて島の概要についてレクチャーを受ける。



西ノ島ふるさと館の展示を見学。



観光協会ガイドの口村氏によるレクチャー。



摩天涯で放牧中の馬を間近に観察。



摩天涯の頂きから日本海を望む。



国賀海岸の通天橋の眺望。

以上が 2015 年度の現地訪問のプログラムである。例年、9 月初旬の現地訪問ということで、研修実施に際しては台風の接近や影響への心配が付きまとう。2015 年度も、直撃こそしなかったが、17 号・18 号のダブル台風の接近に伴って大荒れの天気となり、フェリーの出航が危ぶまれた。幸いなことに出発日に乗船予定の隠岐汽船のフェリーは無事出航となり、現地訪問プログラムは実施へと至った。心配された天気も、晴天と雨天が目まぐるしく入れ替わる不安定な様相であったが、島内視察のエクスカッションや西ノ島ジオツアーといった最も天気によって左右されるプログラムでは、晴天に恵まれることとなった。計画したプログラムで悪天候のために中止となったのは、3 日目の午前中に予定していた「海中展望船あまんぼう」への乗船であった。小型船のため波の影響を受けやすく、過去の研修でもたびたび出航が中止となることがあったが、今回もやむを得ない結果となった。生憎の雨天であったが、代替プログラムとして港のある菱浦地区のまち歩きを行い、余った時間はフリータイムとした。

過去を振り返ると、台風による影響があったのは今回を含めて 7 回中 3 回と比較的高確率である。うち 1 回は、2 日目に隠岐諸島を直撃することになったため、最終日（当時の日程は 2 泊 3 日）に復路のフェリーが出航するかどうか危ぶまれた。参加メンバーと相談した結果、2 日目に研修を切り上げるよりも万一の場合は延泊することを選択したが、幸いながらその時はフェリーが無事に動いたので、予定通り 3 日目に大学に戻ることができた。このように、離島である海士町へのフィールドワークを実施するに際して、天候がプログラムに与える影響は極めて大きい。開催時期を台風の影響の少ない時期に変更するという方法がないわけではないが、8 月には事前研修などの準備活動があり、また、受け入れる海士町側にも様々な都合があるため、当面は 9 月初旬に固定せざるを得ないと思われる。

#### （４）事後研修と『海士町訪問記』の作成

4 日間の現地訪問プログラムを通じて参加した学生たちは非常に大きな刺激を受ける。事前研修で明確にした研修課題をクリアするために、現地で講義を担当してくださった講師の方々に対し積極的に質疑応答したり、3 日目の BBQ で山内町長や吉元総務課長、豊田学習センター長らと濃密な対話を経験したりするなかで、事前に設定した研修課題を明らかにする作業だけでなく、「本気で地域を再生しようとしている人たち」との出会いと交流を通じて自分自身に不足しているものが何かを考え、日々の生き方や今後の進むべき道について再考を迫られるという刺激的な体験をする。そして、この体験こそが、「地域学入門」での山内町長による講義や海士町を扱った文献による学習だけでは得られない「リアルな学び」であり、たとえ課外活動であっても自主的にフィールドワークに参加する意義と言えるものだろう。

海士町訪問研修においては、以上のような体験から得られた気づきを言語化するプロセスを大切にしている。現地訪問の最終日の朝、慌ただしいなかではあるが、チェックアウト前の 1 時間を使ってミーティングを実施する理由はこのためであり、事後研修へつなげる大切な時間である。現地訪問を終えて鳥取に戻ると、今度は混乱状態にある各自の頭をクールダウンさせながら、自分自身の内なる変化を省察し、それを研修レポートである『海士町訪問記』として言語化する事後研修へと移行する。2015 年度は現地訪問から 1 週間ほど経過した 9 月 16 日の午前



完成した海士町訪問記

中（9：00～12：00）に事後研修会を開催し、各自が作成したレポートを持ち寄って一人ずつ発表した。他のメンバーは発表を聞いた感想や質問を発表者に投げかけるとともに、レポートの修正点についてアドバイスをを行う。この作業を一巡させた後、『海士町訪問記』の完成に向けてスケジュール調整を行い、訪問記の製本・発送作業を行う日まで各自がレポートの校正を行った。こうして2015年度版の『海士町訪問記 7』が完成し、10月9日（金）の午前中に印刷・製本作業を行うとともに、現地でお世話になった方々に向けて冊子を発送した。

### （５）費用その他

以上、事前研修に2日、現地訪問に4日、事後研修に2日（うち1日は印刷・発送作業）の計8日をかけて実施している海士町訪問研修であるが、以上のプログラムを実施するのにかかる費用については、たとえ自発的に開始された課外フィールドワークであっても、学生の参加を促すためには、やはり大学から一定の支援が不可欠と言える。そのため第1回目の2009年度より、地域学研究会の予算および学部長経費を財源としてプログラムを実施してきたが、2013年度からは「地域再生プロジェクト」において「地域再生フィールドワーク」として認定されたことにより、プロジェクト経費の配分を受けることができるようになった。なお、2014年度と15年度については、学長裁量経費の配分を受けることができたため、研修にかかる経費は全て学長裁量経費で賄っている。

これにより、大学から隠岐汽船のフェリーに乗船する七類港までの往復の貸切りバス代と海士町・西ノ島における移動、現地研修において海士町役場の職員以外で講師を務めていただいた方々への謝礼金やジオツアアのガイド料などを大学側で負担することが可能となり、学生の自己負担は、往復の隠岐汽船フェリー代と西ノ島への移動にかかる内航船の運賃、3泊分の宿泊費と昼食代そして観光プログラムの費用（海中展望船あまんぼう乗船料）と土産代の総額2万5千円余りである。ただし、フェリーと内航船の費用については尚徳会給付金の申請が可能となっているため、事後清算することにより実質的な負担は2万円程度に収まっている。

## 3. 海士町フィールドワークアンケート調査の実施

### （１）アンケート調査の目的と対象

以上の海士町訪問研修の全プログラムを通じて、学生たちは非常に多くの刺激や気づきを得て、それを自身の成長の糧としていることが分かる。完成した『海士町訪問記』に目を通すと、海士町で出会ったキーパーソンたちとの交流を通じて、自分自身の物事の見方や考え方に変化が芽生えた様子を見てとることができるので、この訪問記は彼らの成長を知る手がかりとして非常に重要なものと言える。ただし、これだけでは彼らの成長を具体的に説明することは困難であるとともに、彼らにとって海士町訪問研修が満足なものであったかどうかなど、本研修に対する評価を明確に知ることはできない。そこで、研修に参加した学生を対象に評価アンケートを実施し、本研修に対する学生の満足度や課題認識などを明らかにするとともに、この評価アンケートの分析から、海士町訪問研修を通じて学生たちにどのような効果がもたらされたのかを検証してみたい。既に述べた通り、延べ78名の学生が1年次において海士町訪問研修に参加しているが、中には既に卒業してしまった学生もいるため、今回のアンケート調査の対象については、在校生に限定することとした。なお、本アンケート調査については、実施した期間が2014年度であったため、対象とした参加学生数は、2011年度の8名、2012年度の16名、2013年度の11名そして2014年度の5名の計40名である。



## (2) 調査期間と方法

アンケート調査の期間は、2015 年 2 月 6 日から 2 月 9 日までの 4 日間である。調査の方法は、地域学入門でティーチング・アシスタントを務めてくれた大学院生 2 名を調査員としてアルバイト雇用し、彼らがアンケート用紙を用いて学生一人ひとりに対して面接を行った。面接の際は、調査対象の学生に筆者からアンケートへの協力依頼をメールで送信した上で、院生調査員が対象学生と接時間の調整を行い、面接会場にて 1 人あたり 20～30 分をかけて実施した。なお、院生調査員の 2 名も 2014 年度の海士町訪問研修にスタッフとして参加しており、研修プログラムを学生たちと一緒に体験した上で面接調査に従事している。

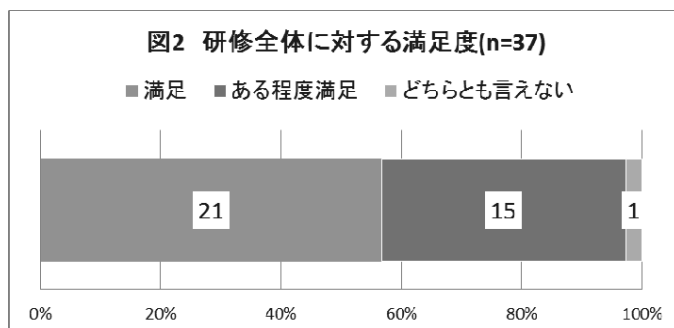
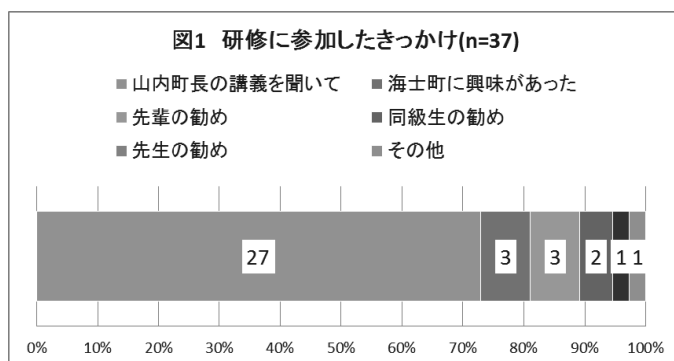
面接調査を行った結果、対象となった 40 名の学生のうち 1 名は海外留学のため連絡が取れず、また、2 名は学生側の都合により面接への協力が得られなかったため、最終的に 37 名から回答を得ることができた（回答率 92.5%）。回答者 37 名の所属学科は、政策 22 名、教育 2 名、文化（芸術文化センター含む）11 名、環境 2 名であった。また、男女別では男子が 11 名、女子が 26 名であった。

倫理的な配慮としては、学生個人に対する面接調査の日程調整と実際の面接を院生調査員が実施することにより、研修の良かった点や悪かった点などを公平に評価し、自由に発言できるように努めたほか、調査を通じて得た個人の情報については、統計的に処理することによって回答した個人が特定できないよう配慮し、またその旨を本人に伝えている。

## 4. アンケート調査結果

### (1) 海士町訪問研修に参加したきっかけ（図 1）

まず、学生たちが何をきっかけにして本研修に参加を決めたのかを尋ねたところ、元々「海士町に興味があった」のは 3 名のみで、7 割以上の 27 名が「山内町長の講義を聞いて」と回答している。2009 年に本研修が始まったきっかけはまさに「地域学入門」における山内町長の講義であったが、その後に海士町を訪問した学生についても同様のことが言える。海士町のことを詳しく知らない学生に対しても、行財政改革や地域振興に挑む現場を実際に見てみたいと思わせる山内道雄町長の講義の迫力や人を惹きつけるリーダーとしての魅力は今なお健在である。



### (2) 研修全体に対する満足度（図 2）

「総合的な評価」として位置付けられている本設問に対する回答は、5段階評価のうち「満足」が6割弱の21名、「ある程度満足」が4割の15名と、1名を除いて全員が肯定的な評価となっており、大変満足度が高い。「どちらとも言えない」と回答した学生は、その理由として、「自分の成果に満足できていない」とコメントしており、研修自体に問題があるというよりも、研修で学んだことを自分自身の中でうまく消化できていないことへの不満を表したものと考えられる。

### （３）現地研修で最も印象に残ったプログラム(図3)

参加学生から高い評価を得た本研修であるが、現地研修の一連のプログラムの中で何が一番印象に残ったのかを尋ねたところ、約半数の19名が「島前高校生との交流」を挙げ、続いて9名が「宿舎でのBBQ」、5名が「講師のレクチャー」そして4名が「島内エクスカージョン」を挙げた。

表2は、印象に残った理由を一覧にまとめたものである（島内エクスカージョンを選択した理由については割愛）。

最も回答の多かった「島前高校生との交流」では、公営塾「隠岐国学習センター」において、センターの代名詞とも言える「夢ゼミ」に参加し、そこで島前高校生と一緒に「夢ゼミ」を体験した際の印象が率直に語られている。回答の中に「しっかり」という言葉が目につくが、「夢ゼミ」を通じて自分の夢や将来ビジョンを「しっかり」と他者に語る訓練を受けている島前高校生と、明確な目標を持たずに大学生生活を漫然と過ごしがちな自分とを対比し、年下の高校生によって自らの至らなさ気付かされるという体験から相当なショックを受けていることが伺われる。換言すれば、そのような体験を通じて、学生たちがセンターの

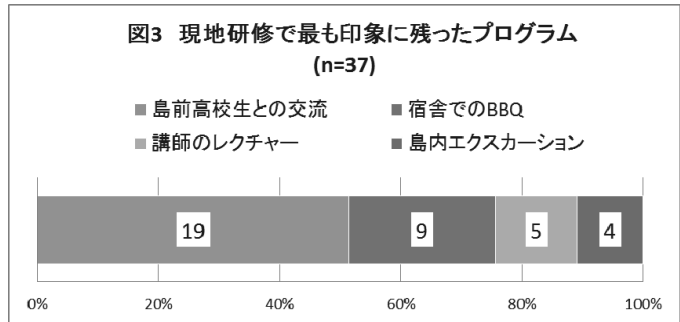


表2 最も印象に残ったプログラムとその理由

回 答	最も印象に残った理由	参加年度
島前高校生との交流	早稲田に行きたいという生徒が印象的だったから。	2011年度
	高校生なのに自分の考えをしっかりと話していたから。	2012年度
	高校生なのに自分の考えをしっかりと話していたから。	2012年度
	夢ゼミで地元に戻りたい理由が明確になった。	2012年度
	学校以外で高校生と交流するのが良かった。	2012年度
	自分のことを考える時間になった。	2012年度
	自分の経験の中にも夢ゼミのような活動があればよかった。	2012年度
	いろんな人、大人の前で自分の夢について話せる環境があるのが羨ましい。	2012年度
	高校生なのにしっかりと話して、すごかった。	2012年度
	大学生が高校生に負けていると思った。	2012年度
	高校生の意識が高く、刺激をもらった。	2013年度
	夢ゼミはやったことはなかった。	2013年度
	高校生がしっかりと話して、自分も頑張らないといけないと思った。	2013年度
	自分より年下なのにもしっかり意見を伝えていてすごいと思った。	2013年度
	高校生がしっかりと話して、自分も高校の時にそんなふうにしてほしかった。	2013年度
	勢いと元気がある。	2013年度
宿舎でのBBQ	高校生が自分の時とは違ってしっかりと話していた。	2013年度
	自分の高校の時と比べてすごく話して話していた。	2013年度
	自分より年下の高校生がキャリア教育を受けているのにびっくりした。	2013年度
	いろいろな人と話ができた。	2011年度
	自然の食べ物の彩りが印象的だった。	2011年度
	豊田さんとたくさん話した。	2012年度
	豊田さんと一対一で話ができた。	2012年度
	豊田さんと気軽に話ができた。	2012年度
講師のレクチャー	美味しいかった。	2013年度
	豊田さんに後押しされたから。	2014年度
	未来に希望が持てたから。	2014年度
	豊田さんとの話が印象的だった。	2014年度
	直接話が聞けたから。	2011年度
	東京で働いていた岩本さん離島にくるといことは、海士町に魅力があると思ったから。	2011年度
講師のレクチャー	初めてのフィールドワークで興味があつたから。	2012年度
	岩本さんに人生の話を聞いて魅力を感じたから。	2013年度
	背中を押されたから。	2014年度

特色ある教育プログラムである「夢ゼミ」の有効性を明確に理解できるのと同時に、自分自身が受けてきた今日の教育システムのあり方に対して疑問を抱くきっかけにもなっている<sup>63</sup>。

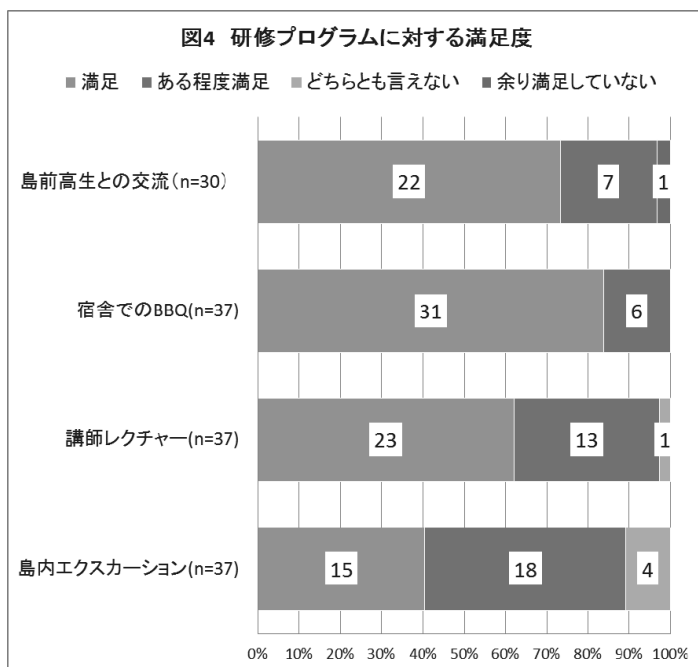
一方、「宿舎での BBQ」の選択理由については、海・山の自然の食材の美味しさもさることながら、それ以上に、ゲストとして同席していただいた海士町のキーパーソンの方々と BBQ を楽しみながら交流できた体験が重視されている。中でも隠岐国学習センター長の豊田庄吾先生がゲストとして参加くださった年は、毎回 BBQ の場がそのまま豊田先生と学生たちとの即席の「夢ゼミ」に移行して、学生一人ひとりと豊田先生との深いコミュニケーションが繰り広げられる。その際、「島前高校生との交流」プログラムでショックを受けていた学生たちにとっては、このような豊田先生との対話を通じて改めて自分自身と向き合い、漠然としていた「やりたいこと」への気付きを得ると同時にその実現に向けた後押しを受ける。

さらに「講師のレクチャー」においても、海士町の行財政改革をリードした行政職員や、I ターンで海士町に移住し大きな成果を挙げている方々など、数々のキーパーソンとの直接の出会いがあり、彼らによる講義や質疑応答から非常に多くの刺激を受けている。海士町という地域再生がリアルタイムで進む現場で得られる多様な交流体験が自己変容への契機となり、さらにそのことが研修の満足度を高めることにつながっていると考えられる。

#### （４）個別の研修プログラムに対する評価（図４）

「島前高校生との交流」「宿舎での BBQ」「講師のレクチャー」「島内エクスカージョン」という順で学生の印象に残った研修プログラムであるが、ここではそれぞれの満足度を５段階評価で尋ねている。

いずれのプログラムに対する満足度も、ほぼ肯定的な評価で占められていることが分かるが、満足度という観点では「島前高校生との交流」よりも「宿舎での BBQ」が上回り、８割を超える学生が「満足」と回答している。これは（３）で述べたように、「印象」という点では島前高校生との交流で受けたショックが大きかったが、「満足度」という点では、食事の美味しさに加えて豊田先生などのゲストとの深い対話・交流が大きく影響したと考えられる。

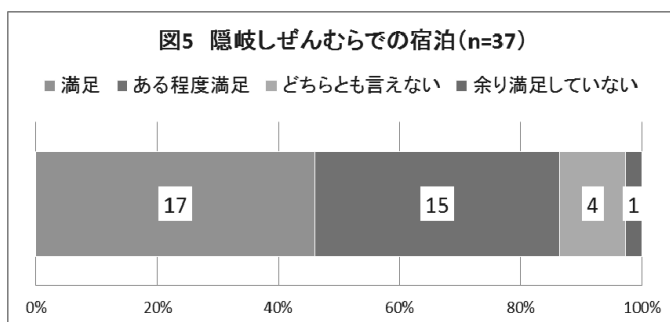


#### （５）隠岐しぜんむらでの宿泊（図５）

毎年の訪問研修の際に宿舎としているのが「隠岐しぜんむら」という公設の合宿所である。金光

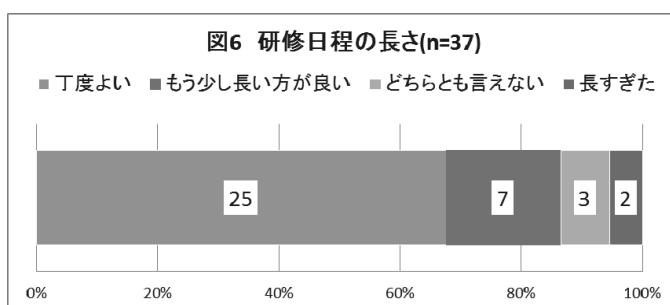


寺山の中腹に位置し、山の麓にある豊田集落の景色や島後方面の眺望など、部屋からの眺望が素晴らしい。ただし、大広間の和室で宿泊まりするのにに対し宿泊料金は 1 泊 2 食付きで 5～6 千円(食事内容によって変わる)と、昨今のビジネスホテルと比べて割高感はあるが、半数近くの学生が満足と回答し、さらに 8 割以上の学生が肯定的な評価を示していることから、特に問題はないと判断できる。



### (6) 研修日程の長さ (図 6)

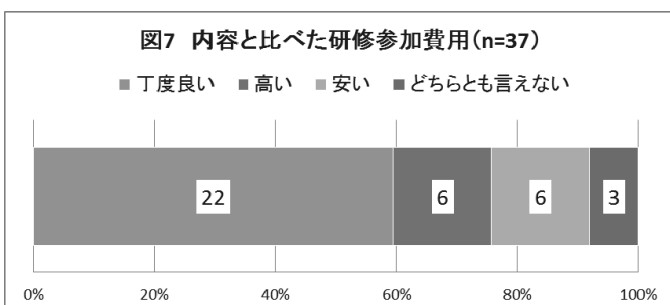
2013 年度までは 2 泊 3 日, 2014 年度からは 3 泊 4 日の日程で現地研修のプログラムを実施しているが、その長さについては 7 割弱の学生が「丁度良い」と回答している。一方、「もう少し長い方が良い」と回答している学生が 7 名いるが、これはすべて 2013 年度までの研修に参加した学生からの意見であった。2 泊 3 日での研修では、やはり慌ただしさを感じる学生は少なくないことから、3 泊 4 日に 1 日延長したことは妥当であったと判断できる。なお、「長すぎた」と回答した学生の研修期間は、2 泊 3 日と 3 泊 4 日が 1 名ずつであった。



2 泊 3 日での研修では、やはり慌ただしさを感じる学生は少なくないことから、3 泊 4 日に 1 日延長したことは妥当であったと判断できる。なお、「長すぎた」と回答した学生の研修期間は、2 泊 3 日と 3 泊 4 日が 1 名ずつであった。

### (7) 内容と比べた研修参加費用 (図 7)

本研修への参加費用の妥当性を尋ねたところ、6 割・22 名の学生は「丁度よい」と回答している。これ以外の回答では、6 名ずつの学生が「高い」と「安い」と回答しており、「高い」に集中せず二分する評価となった。以上の結果から、参加費用についてはほぼ妥当であると判断できるだろう。



### (8) 事前研修・事後研修に対する評価 (図 8)

現地研修の前に 2 回 (7 時間程度) にわたって実施する事前研修および現地研修終了後に 2 回 (6 時間程度。うち 1 回は「海士町訪問記」の冊子の作成と発送作業) にわたって実施する事後研修については、どちらも 8～9 割の学生が肯定的に評価している。事前研修については約 9 割の

学生が有効性を認めている一方、事後研修については、肯定的な評価の割合は減少するものの、逆に「役立った」と回答した人数は事前研修をやや上回る結果となった。

### (9) 地域づくりに対する理解 (図9)

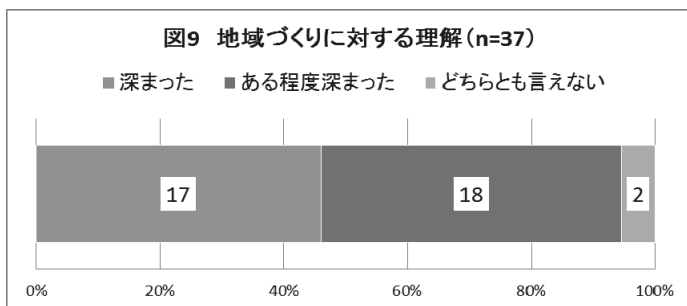
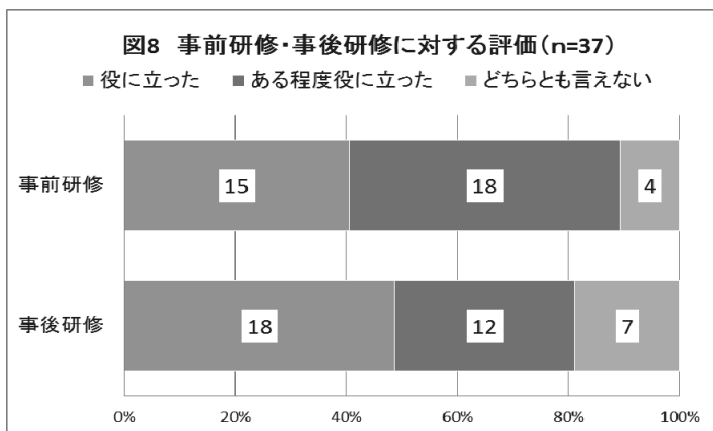
これまで、満足度という指標を中心に本研修への評価を分析し、現地研修のプログラムはもとより宿泊施設や日程、費用や事前・事後研修といった諸条件についても概ね高い評価が得られていることが分かった。ここからは視点を変えて、参加した学生たちが自らの能力的な変化についてどのように評価しているかを確認する。

本研修を実施する最大の目的は、「地域学入門」での山内町長の講義や地域学に関する理論的な学びを海士町という実践現場において再確認しつつ、講義では十分に学びきれなかった行財政改革や地域再生の背景や過程、あるいは山内町長以外に実際に地域づくりに取り組むキーパーソンの思いに触れて、地域づくりへの理解を多様な側面から深めていくことにある。その点に関する学生からの回答は、「深まった」が半数弱の17名、「ある程度深まった」がほぼ半数の18名となっており、本研修の教育的効果に対する学生の評価は非常に高いと判断できる。

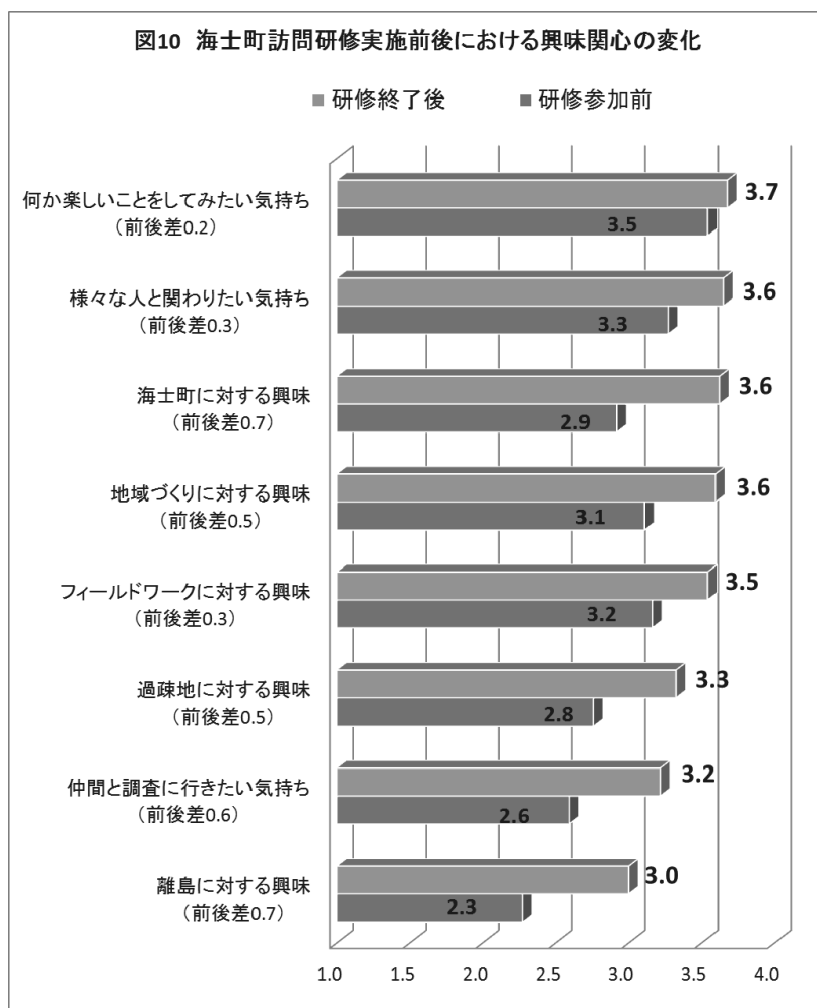
### (10) 海士町訪問研修実施前後における興味関心の変化 (図10)

「地域づくりに対する理解」の他に本研修に何が期待されるかを考えると、本研修の主たる対象が大学に入学して半年にも満たない1年生であることから、卒業研究や将来の仕事に求められるような具体的なスキルの獲得というよりも、離島や過疎地域といった深刻な課題に直面する地域への関心や課題解決に向けた地域づくりへの興味が高まることで、大学での学びに対する意欲や日々の学生生活における彼らの主体性が高まることがむしろ重要と言えるだろう。

そこで本設問では、学生の内なる「興味関心の高まり」に焦点を当て、①地域づくりに対する興味、②離島に対する興味、③過疎地に対する興味、④海士町に対する興味、⑤フィールドワークに対する興味、⑥何か楽しいことをしてみたい気持ち、⑦様々な人と関わりたい気持ち、⑧仲間と調査に行きたい気持ち、の8項目について、研修に参加する前と参加した後それぞれの興味関心の度合いを、「とてもある」(4点)、「ある程度ある」(3点)「あまりない」(2点)「全くない」(1点)の4件法で尋ねて研修参加前と終了後の平均点を比較した<sup>4)</sup>。



結果は図 10 の通りである。研修終了後の興味関心のポイントが最も高いものから順に見てみると、「何か楽しいことをしてみたい気持ち」が 3.7 点で、「様々な人と関わりたい気持ち」、「海士町に対する興味」「地域づくりに対する興味」の 3 項目が 3.6 点、そして「フィールドワークに対する興味」の 3.5 点がこれに続く。8 項目の中で最も点数が低かったのは「離島に対する興味」の 3.0 点であるが、前後の変化という点ではこの「離島に対する興味」と「海士町に対する興味」が最も大きく、前後差はいずれも 0.7 点であった。また、こ



の 2 項目に続いて研修前後の変化が大きかったのは「仲間と調査に行きたい気持ち」の 0.6 点と「地域づくりに対する興味」「過疎地に対する興味」の 0.5 点であった。

程度の差はあるものの、学生は本研修を通じて 8 項目すべてに対してポジティブな変化を感じており、学生たちの様々な興味関心を高める効果があることが分かる。とりわけ普段からイメージが湧きにくい離島や過疎地域の現実の姿に触れたことで、それらに対する興味が大きくアップすると同時に海士町そのものへの興味や地域づくりに対する興味も大きくアップする傾向が認められる。また、このような変化を 1 年生の段階で体験することにより、偏差値教育に振り回されて明確な目標や目的を持たずに鳥取大学に進学してきた学生であっても、できるだけ早期に自身の将来ビジョンや現在の学生生活を見直し、主体的に学びそして主体的に生きるきっかけが与えられるという点を考えると、本研修の意義は非常に大きいと言えるだろう。

(11) その他、研修を通じてより強く感じるようになったこと (図 11)



地域づくりへの理解を深め、離島や過疎地域の地域づくりやフィールドワークに参加することなどへの興味関心を高める効果が確認された本研修であるが、それ以外に学生たちはどのような変化を感じているだろうか。本設問では、図11に示されている7つの選択肢と「その他」の計8つの選択肢を用意し、「研修を通じてより強く感じるようになったこと」を複数回答で尋ねた。

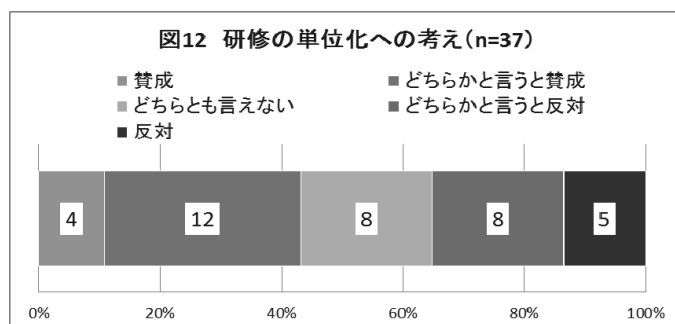
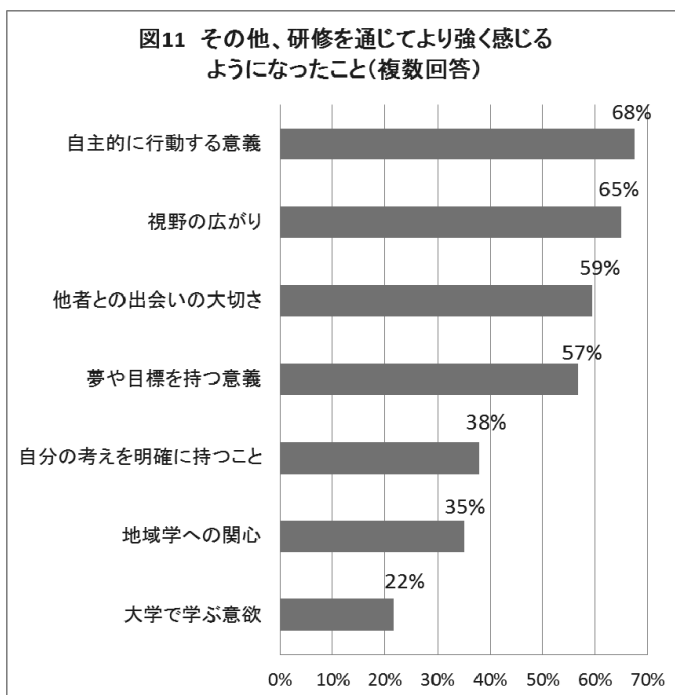
その結果、「自主的に行動する意義」を感じるようになった割合が68%と最も高く、以下「視野の広がり」が65%、「他者との出会いの大切さ」が59%、「夢や目標を持つ意義」が57%と、2人に1人以上の高い割合が続く。第5位以下は、「自分の考えを明確に持つこと」が38%、「地域学への関心」が35%、「大学で学ぶ意欲」が22%となり、上位4項目よりも20ポイント以上割合が低下している（「その他」を回答した者はゼロ）。

海士町でのフィールドワークが「大学で学ぶ意欲」を直接的に強く意識させることは難しいかもしれないが、学生たちが自主的に行動して視野を広げ、夢や目標をしっかりと持つことができるようになれば、自ずと大学での学びに対する意欲を高める可能性は高い。それゆえ、本研修を通じて高めた興味関心や学生生活に対する前向きな意識を、どのように次のステップにつなげてゆけるかがこれからの重要な課題になる。

## （12）研修単位化への考え（図12）

これまでのアンケートの結果分析より、学生たちが示した海士町訪問研修に対する満足度や、研修全体を通じた教育的効果に関する評価は非常に高いと思われる。この結果は、本研修が地域学を修得するうえで、学部の特長科目と同等ないしはそれ以上に重要な役割を担い得ることを示しているといえるが、現在はあくまで「課外フ

ィールドワーク」として単位認定の対象外であり、それゆえ運営面においても、教員による研修全



般のコーディネートや現地研修への引率、事前・事後研修の指導などは基本的にボランティアワークとなる。以上の問題をふまえると、本研修を地域学の修得に必要な科目として積極的に評価し、教育課程上に位置付けて単位化することも検討に値するだろう。

本設問ではそうした問題を参加した学生に投げかけ、単位化の是非を尋ねた。結果は、「賛成」および「どちらか」と賛成」の肯定派が4割余りの16名だったのに対して、「反対」および「どちらか」と反対」の否定派が3割余りの13名と肯定派がやや優位であるが、意見としては大きく二分する形となった。

表3は選択した理由の一覧である。これを見ると、単位化否定派の学生が疑問視するのは、本当に海士町のことを学びたいと思って参加する学生だけでなく、単位を目当てに参加する学生が含まれるようになることである。現在は向上心の強い学生が自発的に参加しているため、少人数でも濃密で有意義な時間を経験できたものが、単位目的の学生が参加することで研修全体の質が低下するのではないかという点は単位化のデメリットとして十分注意する必要がある。一方、肯定派にはデメリットを感じている学生もいるが、それ以上に多くの学生が海士町に行く価値を認め、単位化が学生の参加を促すメリットを重視している。

表3 単位化に対する考えと理由

	回答の理由
単位化肯定派	いろいろ経験ができる。
	せっかくなので単位をもらった方がいい。
	行っただけでその価値があるから。
	参加者は増えるが、中途半端な人が行くと影響されすぎる。
	外にでる機会がない人を無理やりにも連れ出す機会。
	少しでも多くの人が来るきっかけになる。
	あつたらうれしいが、単位に左右されてとるべきものではない。
	すぐいい体験ができるが、日程や費用が人によって問題かもしれない。
	参加者は増えるかもしれないが、小人数のメリットもある。
	行ったことで、自分の中で何かかわるから。
単位化否定派	お金が出るなら自分のためになるので、行ってみるとよい。
	学んだという証明のために単位をもらうべき。
	消極的な学生が悪い影響を当たれるかもしれないが、機会を与えることで勉強になるかもしれない。
	他のフィールドワークでは単位ができるから。
	単位化することで行こうとする人が増えるが、単位のためだけでは意味がない。
	単位化してまうと熱心な人以外も来てしまう。
	自分は単位をもらえなかったから。
	単位にするには期間が短い。
	いい加減な気持ちでは参加してほしくない。
	意欲がない人にひきずられて皆の意欲がなくなる。
単位化肯定派	意欲がある人はいいが、それ以外は時間の無駄。
	自分の意思で行ってほしいから。
	単位をあげると、逆に行きやすくなるけど、あんまり前向きではない学生が行って、全体の雰囲気に影響する。
	少人数で真面目な話をするのがいいから。
	行く価値はあるが、単位目的で行ってほしくない。
単位化肯定派	無理やりいかせるのは利点がない。

### (13) 地域活動への参加(表4)

図10を見ると、本研修に参加した学生は、研修参加以前から比較的積極性を備えている傾向があると思われるが、海士町での経験を通じてさらにそうした興味関心を高め、自発的に関心のある地域づくり活動に参加することが期待される。そこで学生に参加している地域活動の有無とその内容を尋ねたところ、およそ8割にあたる29名が地域活動に参加していることが分かった。また、表4は29名の学生が参加している地域活動の一覧であるが、教員が取り組んでいる研究や実践との関係もあるため、地域づくり活動への参加については、学科ごとに特色が見られる。

## 5. 終わりに～今後に向けた課題

アンケート調査の分析結果に見る学生たちの海士町訪問研修に対する評価は、概ね筆者の印象を具体的に裏付けるものであり、海士町での島前高校生や地域づくりのキーパーソンとの交流を通じて非常に多くのことを学ぶと同時に、自分の至らなさへの気付きと自己変容への契機をつかみ、後の学生生活に積極的に活かしたいという思いが伺われる。

学生たちにこれだけの変化が見られるのは、何と言っても山内町長をはじめ海士町の行財政改革や地域再生をこれまで陰ひなたで担ってきた数々のキーパーソンから、幾度も壁に突き当たりながらも懸命の努力と創意工夫で課題を乗り越えてきた経験を直接語っていただけるからであり、また、そのような経験を積んできたキーパーソンから頂くアドバイスにこれ以上ない説得力があるからである。そう考えると、実際に地域再生の現場に足を運び、地域を支えてきたキーパーソンと交流するプログラムは、「地域学にふさわしい学びの手法」として重要な位置付けが与えられるべきであろう。それゆえ海士町訪問研修にはできる限り多くの学生や教員に参加してほしいというのが正直なところであり、それにはやはり検討すべき課題はあっても、単位化することが望まれるというのが筆者の見解である。2017年度からの学部改組に向けて、本研修の単位化についても近々議論が交わされるものと思われるが、本報告がその一助となれば幸いである。

表4 参加している地域活動

参加している地域活動	学科
いなばの手づくりまつり	政策
えんがわ	政策
えんがわ活動	政策
えんがわ活動	政策
えんがわ活動	政策
えんがわ活動	政策
えんがわ活動	政策
えんがわ事業、BBS	政策
ぼれぼれキッズ	政策
わいわいよどや	政策
屋台部、BBS、きさがき、山紫苑	政策
学童保育(琴浦町)	政策
教育ボランティア、吹奏学団体	政策
空き店舗活用、果物の柿農家で	政策
商品開発、きっかけバス	政策
手作りまつりの委員長	政策
白うさぎ	政策
緑化フェア	政策
扇状山少年自然の家のボランティア	教育
冒険キチ	教育
ホスピタリティ・こどもや	文化
ボランティア・商店街で子どもを対象にした	文化
旧横田医院	文化
合唱サークル	文化
写真部	文化
扇状山少年自然の家のボランティア	文化
村山高校の学生と待ち歩き	文化
夢ゼミ	文化
ソフトボール教室	環境
鳥取県商工会連合	環境

## 注

- 1) 地域学入門に関するこれまでの取り組みの詳細については、渡部昭男・竹川俊夫・土井康作・野田邦弘・岡田昭明(2009)「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容—2009年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』6(2), pp.69-104, 並びに渡部昭男・竹川俊夫・足立和美・鶴崎展巨(2010)「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容(第2報)—2010年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』7(2), pp.157-96, 竹川俊夫・土井康作「初年次必修科目「地域学入門」の2011年度授業実践報告」『地域学論集』8(3), pp.75-104, 並びに竹川俊夫(2013)「初年次必修科目『地域学入門』の2012年度授業実践報告」『地域学論集』10(1), pp.33-62を参照されたい。
- 2) ここに示す参加者はすべて1年生である。過去に地域学入門のTAなど大学院生が参加した年次もあるが、彼らにはスタッフ的な役割を付与していることもあり、今回の参加者数の計算からは除外した。なお学部生の参加は特に1年生に限定しているわけではないが、「地域学入門」の講義を通じて参加者を募集していることもあって例年1年生のみの参加となっている。
- 3) 「島前高校生との交流」が最も印象に残った理由を一覧にした表2に2014年度の参加学生の声がないのは、日程上の都合で交流プログラムが実施できなかったためである。そのため図4における「島前高校生との交流」の満足度に対する回答数は、2014年度の参加者7名分を除く30名



となっている。

- 4) 平均点の算出方法は、研修参加前・終了後とも、(「とてもある」の $n \times 4$ ) + (「ある程度ある」の $n \times 3$ ) + (「あまりない」の $n \times 2$ ) + (「全くない」の $n \times 1$ ) の値を全体  $N=37$  で除したものである。

## 文献

渡部昭男・竹川俊夫・土井康作・野田邦弘・岡田昭明 (2009) 「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容—2009 年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』6(2), pp.69-104.

渡部昭男・竹川俊夫・足立和美・鶴崎展巨 (2010) 「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容 (第 2 報) —2010 年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』7(2), pp.157-96.

竹川俊夫・土井康作 (2012) 「初年次必修科目「地域学入門」の 2011 年度授業実践報告」『地域学論集』8(3), pp.75-104.

竹川俊夫 (2013) 「初年次必修科目『地域学入門』の 2012 年度授業実践報告」『地域学論集』10(1), pp.33-62.

(2016 年 1 月 29 日受付, 2016 年 2 月 3 日受理)